

古川 知明

(埋蔵文化財センター主幹学芸員)

1 はじめに

富山市南部の常願寺川・熊野川扇状地には江本集落が位置する。この集落内には江本経塚が存在し、塚の頂部には梵字を彫り込んだ自然石板碑が1基置かれている。

この板碑は、1963年中村太一路氏や、1976年京田良志氏により調査・紹介された。梵字の下には刻銘があり、願主の名が記されているが、これまで全解説にいたっていない。本稿は江本経塚に存在する板碑についての考古学的な所見を中心に報告するものである。

2 研究史

中村太一路氏は、昭和38(1963)年『富南の歴史』に江本経塚を紹介した。それによれば「江本三ツ塚割に現存する経塚は、敷地二米四方、高さ八五糎、巾六〇糎、厚さ六五糎の石に、「願主」の二字と梵字が刻んであり、基部は埋もれてみえない。もとは稍離れた旧家の邸地内に埋まっていたもので、掘り起こした時、塚石の下から、法華経を一字宛刻んだ小石が箕に一杯出たという。その小石は、現在の塚石の下に又埋めてある。(中略)願主何某が、誰かの供養のためにつくったものである」とした⁽¹⁾。

昭和40年には、『全国遺跡地図(富山県)』にNo.537「江本経塚」として掲載された⁽²⁾。

京田良志氏は、昭和52年6月12日の北日本新聞で江本経塚を詳しく紹介した。銘文は「願主当」「刃住」「□□」「享禄四□□」と判読。刃は州の異体字、亨は享とし、享禄4(1531)年当州(越中州)住の□□(3行目の人物名)が願主となって造立した川石製石塔とされた。また付近の塚根経塚で出土した一字一石埋納経との関連から、本経塚においても一字一石埋納経の存在を示唆した⁽³⁾。

昭和52年10月、江本経塚の東450mに所在する塚根経塚において発掘調査が行われ、その解明を巡っての座談会で、年代に疑問があること、一字一石経が移動するときに箕に入れて持ってきたという話がある一方で、塚自体は動いていない可能性があることが指摘された⁽⁴⁾。

平成元年の『熊野郷土史』では、江本経塚あるいは三ツ塚経塚ともよぶ一字一石納経塚と示された。内容は京田氏のものと同じで、文末に京田氏教示との付記がある⁽⁵⁾。

関秀夫氏は、平成2年全国の経塚集成において、本経塚を「三塚経塚」の名称で掲載した。名称・所在地以外の内容は記載がない⁽⁶⁾。

平成6年刊行の『富山県の地名』では、江本経塚の解説があり、平成元年までの中村・京田両氏の見解を総括した内容となっている⁽⁷⁾。

平成15年戸簾暢宏・橋本正春氏は富山県内80基の経塚を集成し、江本経塚を中世の経塚として紹介した。遺跡立地を13に分類し、標高65mの扇状地上に立地する特徴を示した⁽⁸⁾。

平成20年橋本正春氏は富山県における経塚集成に本経塚を掲げ、「伝経石、板石塔婆刻字銘」と付記し、中世期経塚に位置づけた⁽⁹⁾。

3 江本経塚の概要

(1)所在地

経塚は、金塚進午氏宅南西部の水田中に所在している。現在地番は江本420番地で、旧地番は江本字三ツ塚割883番地(明治初期は2198番地)である。

『富南の歴史』では、かつて同じ三ツ塚地内の別地点(旧邸地内)に経塚が存在し、現在地に移設されたとしているが、所有者の金塚進午氏によれば圃場整備以前から同地に所在していたとのこ

とである。圃場整備以前の旧公図によれば、経塚に該当する場所には半円形の「原野」が所在しており、その北側に接して東西方向の道と水路が通過している。この道は、東へ150mで青柳村を抜ける舟倉道、西へ150mで陀羅尼寺村から小黒村へ抜ける舟倉道と交差する。

地形的にみると、経塚は土川左岸の扇状地上にあり、標高は64mを測る。周囲の水田等には中小の礫が多く見られ、氾濫原であることがわかる。このことは、圃場整備以前の旧公図に水田周囲に「石」と書かれたエリアがいくつか認められ、洪水時に運ばれた巨石または水田から出た礫を廃棄集積した場所と推定されることから理解される。

(2) 板碑の概要 (第3・4図)

板碑は経塚の墳頂部に立つ。現況では約25度東に傾斜するが、昭和52年の新聞に掲載された写真では約15度であり、近年傾斜が増したことがわかる。

石材は、礫岩あるいは安山岩礫砂を含む凝灰岩の河川転石で、節理が多い。斜めに埋まっているため全形が不明であるが、確認できる規格は、縦92cm、幅78cm、厚66cmである。正面及び頭部をノミ加工により整形しており、その他は自然面を残す。このことからこの板碑は自然石板碑と定義される。

現状の頂部の突起は、径15cm、高さ5cmで、上端はやや平らとなっているが、かつてはもう少し尖っていた可能性がある。

正面上部には、径33cm(1尺)の円形の窪みがあり、月輪を示す。窪みの深さは約4cmである。中央には梵字種子のバン(金剛界大日如来)が薬研彫で陰刻される。文字の大きさは24.5cm(8寸)である。

月輪の下には刻銘が4行ある。その釈文は「願主常□/ 苧住/ □善/ 享禄四年」である。「常□」「苧住」「□善」はそれぞれ人名とみられ、3人が連名で造立の願主として記されているものとみられる。常□は常以の可能性がある。苧住はシュウジュウあるいはリジュウと読むとみられる。□善は「譌善」の可能性がある。

(3) 礫石経 (第5図)

経塚及びその周辺には中小の円礫がわずかに散布している。その内扁平平滑な小石10点余を採

番号	表面	裏面	石材	重量(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
1	□□	—	安山岩	74.0	4.9	5.2	2.1
2	秀?	□?	安山岩	33.4	3.8	4.2	2.1
3	兮?	—	花崗岩	90.5	5.6	5.3	2.7

表1 礫石経属性表

集し水洗したところ、礫石経とみられる墨書のある小石が3点検出された。いずれも解読不能であるが、表に1文字から2文字以上の漢字、裏にも文字が書かれているとみられる。赤外線観察を行ったが、明瞭な文字はいずれの石からも確認できなかった。

本経塚には、他地点から出土した礫石経が埋めてあるという中村氏の報告があるが、金塚氏は当初から現在地であるという。いずれの主張が正しいかは現時点では不明であり、後日の調査に期したい。なお仮に礫石経の埋納があったとすれば、本経塚の周囲は耕作のため削られている(特に北側が著しい)ことから、その過程で封土内の礫石経が周囲に散布したものと推定される。

(4) 板碑造立者の検討

板碑に記された願主名は、2文字で構成され称号等がないことから、願主3人は在俗出家者と考えられる。本板碑はかなり大型であることから、この造立には多額の出費を必要としたと推定され、これを3人で分担するにしろ、願主らはかなりの富裕層であったとみられる。

板碑の銘文情報からは、造立の目的・趣旨は判読できない。月輪内に彫られた梵字バンの存在から、金剛界大日如来を主尊とする真言密教色が濃いと考えられる。

江本経塚周辺の寺院分布をみると、北には陀羅尼寺、真言宗龍高寺、浄土真宗安国寺、西には曹洞宗瑞泉寺、浄土真宗伝長寺、南には浄土真宗性宗寺、旧大安寺(現在西方寺)東には真言宗龍高寺末寺円城院が存在し、それらはいずれも半径2km以内に所在する。伝長寺や妙伝寺はもと真言宗と伝える。いずれの寺院かは特定できないが、真言寺院の一つが導師となって石塔造立に関与した

可能性が推定される。

4 街道と経塚（第6～8図）

江本経塚は、布市集落の南方に位置する。布市は、南北朝期越中守護桃井直常が拠点とした地域で、「野の市」、市町として起源を持つという由来地名⁽¹⁰⁾、あるいは有力な密教寺院が集合する宗教施設群の形成などの発展をとげたのは、中世以来ここが主幹的な交通経路上に位置していたことによる。布市は、富山町から飛騨へ向かう飛州（飛騨）街道の通過点で、また立山へ向かう立山信仰道への分岐点でもあったことから、交通の要衝であることがわかる。

飛州街道は別名舟倉道・小黑道と呼ばれ、布市からまっすぐ南下して神通峡へ入る道で、熊野川を渡河した小黑、船峠丘陵の奥津城、式内社姉倉比売神社の門前町とみられる舟倉を通過する。

富山町発の立山道は、鼬川に沿って南行する亀谷道が最短で岩峠寺に至るが、このほか布市を経る黒牧道・長棟道・舟倉道からも東へ延びる立山道が複数本交差し、花崎村経由で岩峠寺に至る。

また、布市から福沢を経由し、熊野川上流から長棟鉾山へ抜ける長棟道が存在し、福沢道とも呼ばれた。

「月岡村花崎村等絵図」（富山県立図書館蔵）は、龍高寺が火災移転した文政7年以後の状況を示した絵図である。これによれば、布市南方の長棟道と舟倉道の分岐点には「追分塚」があり、龍高寺前の「黒牧道」を南行すると暫くして富士山の形をした富士塚⁽¹¹⁾があり、さらに行くと「夫婦石」がある。これらのうち、富士塚は近年まで盛土状の高まりが現存し、明治末の地形図でも形状が確認される。追分塚・夫婦石は現存せず詳細は不明である。

塚根経塚からは礫石経が多数検出された⁽¹²⁾。法華経書写を行ったもので、年代は中世か近世のいずれにおくべきか議論がある。この経塚からは線刻による月輪を表した自然石が出土しており、これが築造年代を示す資料と理解されたが、このような月輪のみを彫った14、15世紀の中世板碑例はなく、年代的位置づけを与えられないでいる。類似した線刻による月輪を持つ例としては、藤塚神明神社境内の自然石石標がある。月輪の下に「神明」と陰刻があり、天和元年（1681）の記年銘が認められる（第7図）。このことから塚根経塚の下限をその頃に置くことは可能である。この経塚の位置を明治44年地形図や旧公図で確認すれば、長棟道の沿線に位置した姿が復元される⁽¹³⁾（第8図）。

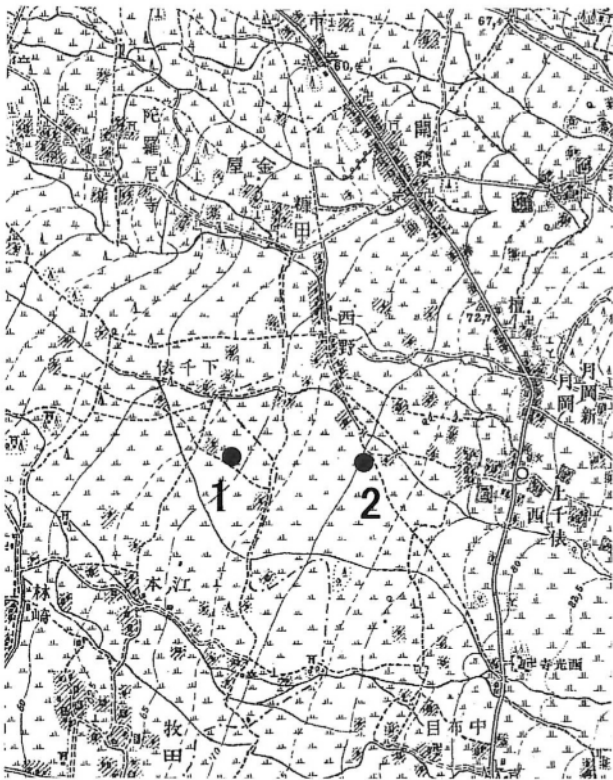
江本経塚は、長棟道から西へ分岐した舟倉道付近に所在する。塚根経塚と異なり、この幹道には面しておらず、西へ150mほど離れている。一方江本経塚の南側には、舟倉道と陀羅尼寺経由舟倉道を東西に繋ぐ道が存在し、この経塚に接する。

この江本経塚には、元の位置から動かされたという話も伝わる。発掘調査で検証するしかないが、元の候補地としては地割図内の「石」と明記された地点があげられる。この地点はちょうど長棟道から分岐した舟倉道と、東西道の結節点にあたり、塚根経塚に似た環境といえる。現存しないため、別の経塚であるか、あるいは江本経塚の元の位置であるかどうかについて検証を行うことはできない。

このほか周辺地域には、経塚をはじめとする信仰に関係した封土構造物・石造物が多い。これらは幹道に面して構築されるという共通した特徴があり、そのことは京田氏も指摘している⁽⁴⁾。立山信仰との関連も推定されるが、それらの性格は多様である。

5 おわりに

私の野帳記録によると、昭和60年5月に初めてこの経塚を訪れている。土地所有者である金塚進午氏の立会のもと、現地で故京田良志先生が細かに説明された記憶がある。当時はこのような板碑は考古資料という意識がなかったので、簡単な図と説明を書き記しただけであり、その他いろいろ話されたことがあったはずであるが思い出せない。その後京田先生の添削を受けた解説板と、金塚



第1図 江本経塚(1) 塚根経塚(2)位置図 (1:25000)
明治44年地形図



1977年撮影の江本経塚（藤田富士夫氏撮影）



江本経塚現況（北から）



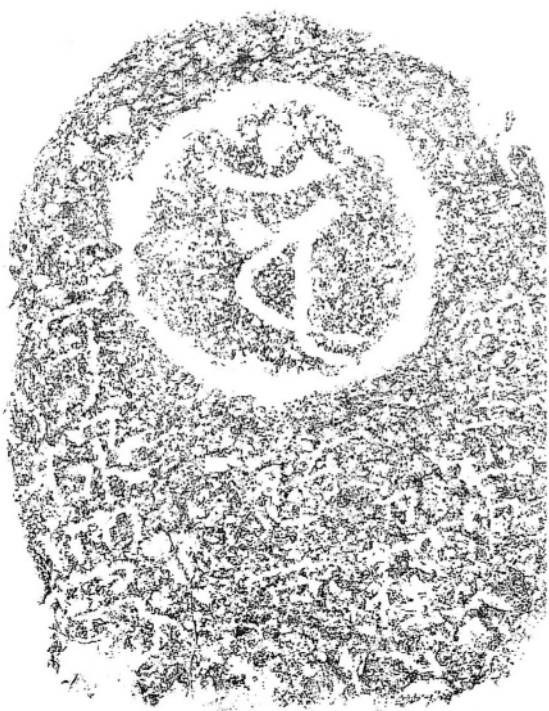
第2図 地籍図



自然石板碑（左側面）



経塚上の自然石板碑（正面）



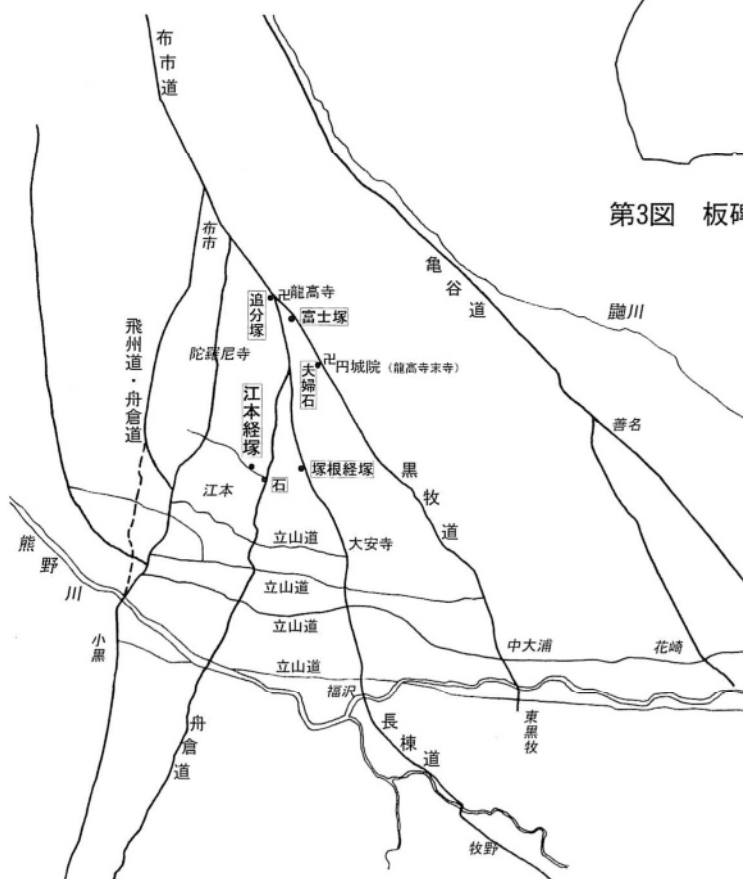
第4図 板碑拓影 (1:5)



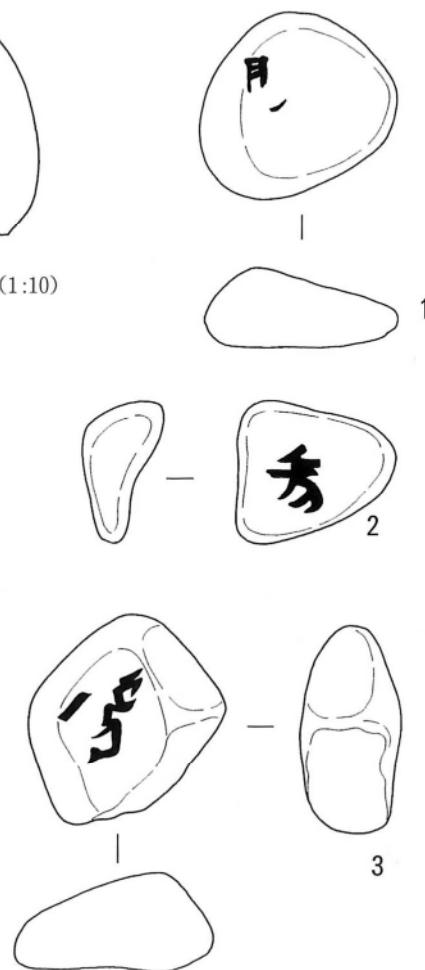
月輪内梵字種子「バン」



第3図 板碑実測図 (1:10)



第6図 江本経塚と周辺の街道



第5図 礫石経実測図 (1:2)

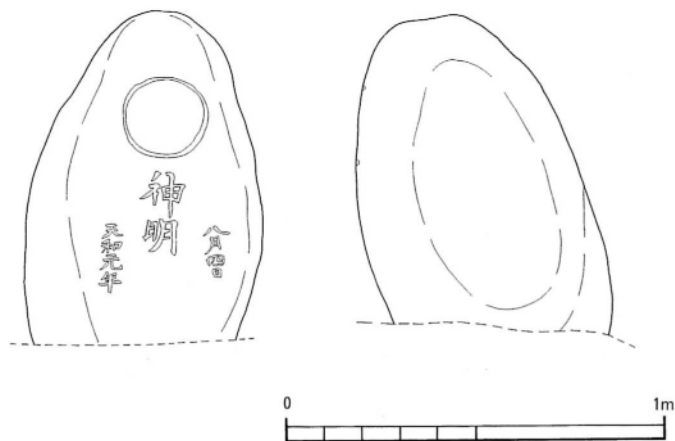
宅の前に標柱を設置し、幾度かの立替えを経て、現在に至っている。

その間学術的な調査研究は進展しておらず、この報告においても現況の地形測量図すらないといった状況であるが、近年中近世石造物の調査を始めたところ、この江本経塚の板碑が思い起こされた。昭和52年の京田良志氏の新聞報告や、同年の市教委による塚根経塚の発掘調査でひととおり性格・年代が論議されたものの、その後今日まで約30年間、銘文はなお未解読で、気がかりであった。今回の報告はその課題解明のための第一歩である。

この報告にあたり、金塚進午氏には過去の経緯など多くのご教示を得た。藤田富士夫氏からは経塚旧状の写真を提供いただいた。金沢学院大学中村晋也准教授には礫石経の赤外線観察に際しご協力を得た。記して感謝申し上げる。

注

- (1) 中村太一路 1963 『富南の歴史』
- (2) 文化庁編 1970 『全国遺跡地図(富山県)』
- (3) 京田良志 1977 北日本新聞昭和52年6月12日付こころ欄『野外に据える仏教遺物 富山・江本経塚』
- (4) 石村喜英・京田良志・山内賢一・藤田富士夫 1978 「座談会 塚根経塚をめぐる諸問題」『富山市塚根経塚発掘調査報告書』富山市教育委員会
- (5) 中村太一路監修執筆 1989 『熊野郷土史』熊野校下自治振興会
- (6) 関秀夫 1990 『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
- (7) 高瀬重雄監修 1994 『日本歴史地名大系第16巻 富山県の地名』平凡社 「江本村」項
- (8) 戸簾暢宏・橋本正春 2003 「富山県の経塚」『富山大学考古学研究室論集 蜷気楼-秋山進午先生古稀記念-』秋山進午先生古稀記念論集刊行会
- (9) 橋本正春 2008 「富山県経典関係考古資料」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- (10) 蜷川校下史編纂委員会編 1968 『蜷川の郷土史』
- (11) 『全国遺跡地図(富山県)』にNo.517「富士塚古墳」として掲載され、『富山市遺跡地図』1976年版に「すもうとり塚」の呼称があるとする情報が追加された。
- (12) 富山市教育委員会 1978 『富山市塚根経塚発掘調査報告書』
- (13) 地形図による復元では福沢道の西側に接していることになるが、『富山市塚根経塚発掘調査報告書』によれば、圃場整備以前の地割図の復元から、福沢道の東側に接して存在したとされる。



第7図 藤塚神明神社境内の自然石石標 (1:20)



第8図 塚根経塚と長棟道跡

(注(12)文献挿図に加筆)